

A GUIDE TO CONTEMPORARY ART HOUSE



講座連続

現代アートハウス入門

ネオクラシックをめぐる七夜



01/30 Sat 2021 02/05 Fri

企画・運営: 東風 企画協力: ユーロスペース
 協力: アイ・ヴィー・シー/ノーム/太秦/コミュニティシネマセンター/ポルトガル大使館/シネマテック・ポルトゲザ/日活
 技術協力・予告編制作: restofilms WEB制作: 坂元純(月光堂) デザイン: loneliness books

文化庁委託事業「文化芸術収益力強化事業」
 文化庁

www.arthouse-guide.jp fb.com/arthouseguide @arthouseguide @arthouseguide

SCHEDULE

- 1/30 (土) 『ミツパチのささやき』 99分+トーク60分
濱口竜介(映画監督)、三宅唱(映画監督)、三浦哲哉(映画研究者)
- 1/31 (日) 『動くな、死ね、甦れ!』 105分+トーク60分
山下敦弘(映画監督)、夏帆(女優)
- 2/1 (月) 『トラス・オス・モンテス』 111分+トーク55分
小田香(映画作家)、柳原孝敦(翻訳家)
- 2/2 (火) 『緑の光線』 98分+レクチャー60分
深田晃司(映画監督)
- 2/3 (水) 『山の焚火』 117分+トーク45分
横浜聡子(映画監督)、カラテカ矢部太郎(芸人・漫画家)
- 2/4 (木) 『阿賀に生きる』 115分+トーク50分
小森はるか(映像作家)、清田麻衣子(里山社代表)
- 2/5 (金) 『チチカット・フォーリーズ』 84分+レクチャー60分
想田和弘(映画作家)

全国18館にて開催

1月30日(土)~2月5日(金) 連日 16:50 開映

東京都 ユーロスペース 03-3461-0211	神奈川県 シネマ・ジャック&ベティ 045-243-9800	大阪府 第七藝術劇場 06-6302-2073	大阪府 シネ・ヌーヴォ 06-6582-1416
京都府 京都シネマ 075-353-4723	兵庫県 元町映画館 078-366-2636	広島県 横川シネマ 082-231-1001	
福岡県 KBCシネマ1-2 092-751-4268	熊本県 Denkikan 096-352-2121	沖縄県 桜坂劇場 098-860-9555	

1月30日(土)~2月5日(金) 連日 19:00 開映 *トーク、レクチャーは録画したものを上映します。

群馬県 シネマテークたかさき 027-325-1744	宮城県 フォーラム仙台 022-728-7866	長野県 長野相生座・長野ロキシ 026-232-3016	新潟県 新潟・市民映画館シネウインド 025-243-5530
--------------------------------	-----------------------------	---------------------------------	------------------------------------

石川県 *2/3(水)休館 シネモンド 076-220-5007	愛媛県 シネマルナティック 089-933-9240	大分県 シネマ5 097-536-4512
-------------------------------------	-------------------------------	--------------------------

2月6日(土)~2月12日(金) 連日 16:30 開映 *トーク、レクチャーは録画したものを上映します。

愛知県 名古屋シネマテーク 052-733-3959

開催時期 1月30日(土)~2月5日(金)
 名古屋シネマテークのみ 2月6日(土)~2月12日(金)
 全国18館にて開催

参加料金 各プログラム=30歳以下: 1200円
 31歳以上: 1800円(全て税込)
 *一部劇場では、30歳以下を対象とした特別先行予約あり。

*新型コロナウイルスの感染状況その他の影響により、プログラム、スケジュールに変更が生じる可能性があります。
 公式ホームページ、各開催劇場のホームページなどで、最新情報をご確認のうえご来場ください。

現代アートハウス入門

ネオクラシックをめぐる七夜

講座 連続

Introduction

アートハウスへようこそ

1970年代から今日まで続く日本の〈アートハウス〉は、“ミニシアター”という呼称で親しまれてきました。ここは世界中の映画と刺激をもとめる観客とが出会う場所。多様な映画体験によって、未来の映画作家だけでなく、さまざまなアーティストを育む文化的ピオトープとしての役割を担ってきました。上映されるのは、ただ楽しむための作品だけではありません。目を覆うほどグロテスクで、心をズタズタに引き裂く映画もあれば、ため息が出るほど美しい眼福の映画もあります。〈アートハウス〉の暗闇でスクリーンが反射する光を浴びることは、多かれ少なかれ—— 私たちの生き方を変えてしまう体験なのです。

「現代アートハウス入門」では、〈アートハウス〉の歴史を彩ってきた傑作を「ネオクラシック(新しい古典)」と呼び、東京・ユーススペースなど全国18の映画館で、7夜連続日替わりで上映します。さらに、2000年以降にデビューした気鋭の映画作家たちが講師として登壇し、作品の魅力を解説。作品から受けた影響なども語ります。その模様を開催劇場のスクリーンに投影し、みなさんとこれからの〈アートハウス〉についての知見を共有します。ぜひこの機会に〈アートハウス〉のドアを開けてみませんか？



『ミツバチのささやき』

監督:ピクトル・エリセ 撮影:ルイス・クアドラド 出演:アナ・トレント、イサベル・テリエリア
1973年(1985年日本初公開) | スペイン | 99分 | カラー ©2005 Video Mercury Films S.A.

第1夜
1/30(土)

内戦終結直後の荒れ果てたスペイン、カステーリヤ高原の小さな村。移動巡回上映で見た「フランケンシュタイン」を精霊と信じた少女アナは、村はずれの廃屋で傷ついた一人の兵士と出会う…。アナを演じた当時7歳のアナ・トレントのイノセンスは、見る人の心をとらえてはなさない。名匠ピクトル・エリセの長編第一作にして、映画史に刻まれたあまりにも美しい傑作。

濱口竜介(映画監督)×三宅唱(映画監督)×三浦哲哉(映画研究者)



映画館でのみ感知することができるような、映画の「ささやき」があります。それを殊更聞こえやすくすることはできませんが、一緒に耳を傾けようとするように話したいなと思ってます。 — 濱口竜介(映画監督)

学生時代、これと決めた特集上映に日参してはその晩、映画日記をつけたり、友人と朝まで長話をした。そうやって何度も反芻したあの場面やあのカットに今でもふと救われたり、悩まされている。 — 三宅唱(映画監督)



『動くな、死ね、甦れ!』

監督:脚本:ヴァイタリー・カネフスキー 撮影:ウラジミール・プリリャコフ
出演:パヴェル・ナザーロフ、ディナラ・ドルカーロワ、エレーナ・ポボワ
1989年(1995年日本初公開) | 連日 | 105分 | モノクロ ©Lenfilm Studio

第2夜
1/31(日)

第二次大戦直後のロシア。収容地帯と化した炭鉱町に暮らす少年ワレリカ。無垢な魂を持って余し、不良ぶっては度々騒動を起こす彼を、いつも守護天使のよう救ってくれる幼なじみの少女ガリヤ。二人に芽生えた淡い想いは次第に呼応していくが、放校されたワレリカが町から逃げ出すと、運命は思わぬ方向へ…。54歳の新人監督とレンフィルムが生んだ心揺さぶる映画の奇跡。

山下敦弘(映画監督)×夏帆(女優)



「動くな、死ね、甦れ!」をどう言葉で表したらいいのか現時点ではさっぱり分からないのですが、とにかく一人でも多くの人に観てもらい映画の持つ力を体感して欲しいです。 — 山下敦弘(映画監督)



『トラス・オス・モンテス』

監督:アントニオ・レイス、マルガリーダ・コルデイロ 撮影:アカシオ・ド・アルメイダ
1976年(2010年日本初公開) | ポルトガル | 111分 | カラー

第3夜
2/1(月)

ポルトガルを代表する現代詩人であり、マノエル・ド・オリヴェイラ監督「春の劇」の助監督を務めたアントニオ・レイスが、精神科医のマルガリーダ・コルデイロと手がけた初長篇。ポルトガル北東部ミランダ地方の生活の細部を記録した画面に、やがて夢幻的なイメージが横溢する。公開当時、フランスの批評家たちを驚嘆させ、後にペドロ・コスタ監督にも影響を与えた伝説的フィルム。

小田香(映画作家)×柳原孝敦(翻訳家)



二十歳を過ぎてはじめてシネコン以外で映画を観た。大丈夫、世界にはまだ余白があった。このだるさからいつか抜け出し、もう少し遠くまで歩けるかもしれないと、スクリーンを見つめながら思った。 — 小田香(映画作家)



『緑の光線』

監督:脚本:エリック・ロメール 撮影:ソフィー・マンディニュー
出演:マリー・リヴィエール、リサ・エリディヤ
1986年(1987年日本初公開) | フランス | 98分 | カラー ©Les Films du Losange

第4夜
2/2(火)

太陽が沈む瞬間に放たれる緑の光線は幸運の印。オフィスで秘書として働くデルフィーヌは、ヴァカンスを前に胸をときめかせるが、現実は思っているようにはいかない。ひたすら愛の訪れを信じて夏の光に彩られたフランスを北から南、東から西へと彷徨う彼女が最後に出会う奇跡とは…。1986年ヴェネチア国際映画祭金獅子賞受賞した巨匠エリック・ロメール「喜劇と格言」シリーズの一篇。

深田晃司(映画監督)



中学3年生のときにテレビで見た一本のヨーロッパ映画に衝撃を受けて自分の人生は激変しましたが、大人になりそれをミニシアターのスクリーンで見直したとき、その作品の真価をようやく知ることができました。画集に印刷された絵画と実物のそれが違うように、映画もまた映画館で見てこそ味わい尽くせるものだと思います。 — 深田晃司(映画監督)



『山の焚火』

監督:フレディ・M・ムラー 撮影:ピオ・コラーディ 音楽:マリオ・パレッタ
出演:トーマス・ノック、ヨハンナ・リーア
1985年(1986年日本初公開) | スイス | 117分 | カラー

第5夜
2/3(水)

下界から隔絶されたアルプスの山腹で自給自足の生活を送る4人家族。姉と両親の愛情を一身に受けて育った聾啞の弟が飛び出し、山小屋でひとり生活を始める。やがて姉の妊娠が発覚し…。狂おしいほど雄大な自然の懐で紡がれる創世神話的な物語。“ヌーヴォー・シネマ・スイス”の旗手としてダニエル・シュミットらと並び称されるフレディ・M・ムラーの伝説的傑作。

横浜聡子(映画監督)×カラテカ矢部太郎(芸人・漫画家)



いい映画をみた時、衝撃や刺激を受けるというより、息をするのが、生きるのがほんの少し楽になるという表し方が自分にとってはふさわしい。それは既にある理解や感覚を超えた世界をみせられたことに不安になるからではなく安堵するからに他ならない。 — 横浜聡子(映画監督)



『阿賀に生きる』

監督:佐藤真 撮影:小林茂 音楽:経麻朗
1992年(1992年日本初公開) | 日本 | 115分 | カラー ©阿賀に生きる製作委員会

第6夜
2/4(木)

日本海に注ぐ阿賀野川。その川筋に住み込んだ佐藤真ら7人のスタッフは、田植えを手伝い、酒を酌み交わしながら、阿賀で暮らす人々の生活を3年間にわたり撮影した。新潟水俣病という社会的なテーマを根底に据えながらも、人間の命の賛歌をまるごとフィルムに写し、当時としては異例ともいえるドキュメンタリー映画のロードショー公開がシネ・ヴィヴアン・六本木で実現した。

小森はるか(映像作家)×清田麻衣子(里山社代表)



何をどう撮ればいいのかわからなくなったとき、20年前につくられた一本の映画と出会い、背中を押されました。何年経っても現在を映し出す作品たちが、きっとこれから出会う人たちの未来を切り開いてくれるのだらうと思います。 — 小森はるか(映像作家)



『チチカット・フォーリーズ』

監督:フレデリック・ワイズマン 撮影:ジョン・マーシャル
1967年(1998年日本初公開) | アメリカ | 84分 | モノクロ

第7夜
2/5(金)

マサチューセッツ州ブリッジウォーターにある精神異常犯罪者矯正施設の日常を究明に描き、収容者が、看守やソーシャル・ワーカー、心理学者たちにどのように扱われているかを浮き彫りにした本作は、完成一年後の68年から91年までの間、裁判所命令によって一般上映が禁じられていた。フレデリック・ワイズマンの監督デビュー作にして、アメリカン・シネマ・ヴェリテの金字塔。

想田和弘(映画作家)



映画館の暗闇を一步出たときに、世界の見え方が一変してしまう。アートハウスで、そういう体験を何度もしてきた。僕が映画作りで目指すのも、観客にそういう体験をってもらうことである。 — 想田和弘(映画作家)

第1夜 『ミツバチのささやき』
第2夜 『動くな、死ね、甦れ!』
第3夜 『トラス・オス・モンテス』
第4夜 『緑の光線』
第5夜 『山の焚火』
第6夜 『阿賀に生きる』
第7夜 『チチカット・フォーリーズ』